

「小学校道徳における ボランティア学習の位置づけ」

A study on the potentiality of Volunteer-Learning in the moral education on the elementary school.

長 沼 豊

1. 道徳的価値とボランティア学習

平成 23 (2011) 年 3 月 11 日に発生した地震と津波による東日本大震災は、社会に大きな打撃を与えた¹⁾。被災地の学校は直後から近隣住民の避難所になり、教員は被災者支援の先頭に立って活躍したと聞く。福島県内で教員をしている本学卒業生も勤務校に寝泊まりし、震災後は何日も自宅に戻らなかったという。率先して炊き出しなどの手伝いをする現地の児童生徒の姿も報道された。震災直後から被災地では多くのボランティアが多様な支援活動を行い、成果を上げた。

災害復興系のボランティア活動に注目が集まる契機となったのは、言うまでもなく平成 7(1995)年の阪神・淡路大震災である。当時復興支援ボランティアには沢山の若者が活動に関わり、その貢献度からボランティアの教育的な側面(意義)が注目され、1990 年代後半の教育政策に影響を与えた。例えば学習指導要領の平成 10 (1998) 年および平成 11 (1999) 年告示版には初めて「ボランティア」の語が登場し、学校では現在でも多様なボランティア学習の実践が行われている。

ボランティア活動に関わった人の学習性、成長・発達に着目する考え方は「ボランティア学習」として 1980 年代初めから存在する。ボランティア活動が、その支援の対象となる人々の生活の向上を企図するだけでなく、活動に

関わった人々の変容を促すという視点は、教育的なものである。その変容を内面的な変化と捉えた場合、生き方や価値といった道徳的な側面に関わる教育実践としても意味をもつ。

そこで本稿では、小学校の道徳を研究のフレームとしてボランティア学習の位置づけを探ることとする。小学校における道徳教育は、学習指導要領の総則に示されているように、学校教育全体を通して行われるものであるが、本研究のフレームとしては小学校の「道徳」の時間を対象として、その位置づけ、整合性等を探ることとする。学校教育全体を通じた道徳教育におけるボランティア学習のあり方については稿を改めることにしたい。具体的には、小学校学習指導要領に示された内容項目の分析、ボランティア学習のねらい、内容、方法から見た道徳教育実践の関連性・可能性の分析から主題に迫る。

本研究の内容に関連した先行研究をボランティア学習の論考で見ると、小学校道徳に焦点を当てたものとしては上續による「小学校道徳副読本に見る高齢者問題」²がある。道徳教育の論考では、吉村による「道徳教育とボランティア活動」³、原による「生涯学習社会における小・中学校のボランティア教育に関する基礎的研究」⁴などがあり、ボランティアと道徳の関係性を扱ったものとしては、田坂による「ボランティアと道徳ーボランティアと公平性についての一考察ー」⁵がある。ボランティアに関わる道徳教育の関係論文の多くは実践研究か哲学的な観点からの分析であり、小学校の道徳の時間におけるボランティア学習の位置づけに特化したものはない。本研究の意義、オリジナリティはこの点にある。

なお本稿におけるボランティア学習の定義は「社会に存在する多様な課題（支援が必要な状況）に向き合い、その解決策を考え実行し、検証し、その成果や課題を提言することで、よりよい社会作りに自らの意志で貢献するボランティア活動の学習性に着目し、意図的な学習活動として構成された社会体験型の学習」とする。当然のことながら、支援活動や体験活動そのものの場面だけでなく、その前後を含めた学習のプロセスを有し、ねらい・内容・方法が明確化された学習活動の総称である。

2. 小学校道徳におけるボランティア学習の可能性

まず道徳的実践としてボランティア学習を捉えることができるのか、小学校道徳においてボランティア学習は可能なのかについて考察する⁶。

(1)ねらい

平成20（2008）年告示の小学校学習指導要領では、「第1章 総則」の「第1 教育課程編成の一般方針」の2で「道徳教育を進めるに当たっては、教師と児童及び児童相互の人間関係を深めるとともに、児童が自己の生き方についての考えを深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない」と示されている（下線は筆者）。ボランティア活動の体験を通して道徳性を育成することが企図されていることがわかるが、どのような道徳性なのかについては言及されていない。総則は学校教育全体における道徳教育のあり方の基準であることから、活動そのものは道徳の時間で行う必要はない。むしろ教育課程を構成する他の領域（特別活動や総合的な学習の時間）での体験活動を生かして育むことが多いだろう。

道徳の時間（学校教育法施行規則第50条に定められた「道徳」）に関しては、「第3章 道徳」の「第1 目標」のなかで「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成する」と示されている。したがって道徳の時間におけるボランティア学習の実践が意味あるものとして捉えられるかどうかは、ここに示された目標に到達できるかどうかの一つの指標になる。ボランティア活動に参加し、活動自体の意味を考えることは道徳的価値にふれる機会になり、自己の生き方についての考えを深めることになることから、ボランティア学習は道徳の時間と整合性のある教育活動といえる。

同じ「第3章 道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の3(2)では指導に当たって配慮する事項として「集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動などの体験活動を生かすなど、児童の発達の段階や特性等を考

慮した創意工夫ある指導を行うこと」と示されている（下線は筆者）。ここでは創意工夫ある指導の一形態の例としてボランティア活動が取り上げられているが、体験活動を生かすという表現から、ボランティア活動の後に道徳の時間をを用いた事後学習が考えられる。例えば活動中の会話やできごとを想起し、他者や社会に貢献することの意味や意義を考えるとといった授業が想定される。活動そのものの感想の共有から、個々の内面の変化を意識化させる方法もあるだろう。ボランティア学習では、活動体験の前後の学習を含めた学習過程を構成するが、こうした体験後の振り返りの学習は重要である。学習過程の詳細については後述する。

(2)内容項目

次に、小学校学習指導要領に示された道徳の時間で扱う内容項目（「第3章 道徳」の「第2 内容」に示された項目）のうち、ボランティア学習に関連のあるものを挙げてみると表1のようになった。

表1 ボランティア学習と関連性の強い内容項目

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
1 主として自分自身に関すること	(2)自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。	(2)自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。	(2)より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。
	(3)よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。	(3)正しいと判断したことは、勇気をもって行う。	(3)自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。
2 主として他の人とのかわりに関すること	(2)幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。	(2)相手のことを思いやり、進んで親切にする。	(2)だれに対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にする。
	(4)日ごろお世話になっている人々に感謝する。	(4)生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。	(5)日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。
4 主として集団や社会とのかわりに関すること			(3)身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。
	(2)働くことのよさを感じて、みんなのために働く。	(2)働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。	(4)働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。
	(3)父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。	(3)父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。	(5)父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。

ここでいう関連とは、ボランティア活動の特性である「自発性・主体性」（自らの意志で行うこと、自律的・主体的に行うこと）、「無償性、非営利性」（見返りを求めることなく行うこと）、「公共性、公益性」（他者や社会の役に立つことを行うこと）、「創造性、先駆性」（新たな枠組み、制度、価値などを創造すること）の4つのいずれかに関係していることとして該当する項目を挙げた。

学習指導要領の内容項目は「第1学年及び第2学年」「第3学年及び第4学年」「第5学年及び第6学年」として分けて示され、各々が「1 主として自分自身に関すること」「2 主として他の人とのかかわりに関すること」「3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」の4つの視点から構成されている。このうち「3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」には該当する項目がなかったが、他の3つの視点は関連するものがあつた。学年別に見ると「第1学年及び第2学年」は16項目のうち6項目、「第3学年及び第4学年」は18項目のうち6項目、「第5学年及び第6学年」は22項目のうち7項目が該当した。視点の別に見ると「1 主として自分自身に関すること」は6項目、「2 主として他の人とのかかわりに関すること」は6項目、「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」は7項目であつた。この結果、小学校の道徳の時間の全体で見ると計56項目中19項目（約3分の1）がボランティア学習に関連のある内容項目となっていることがわかる。

表1では、学習指導要領解説の付録5⁷と同様、学年段階間で相互に関連ある項目を同じ段に配置しているため、発達段階が上位になると内容がどのように変容するかがわかる。また段ごとの項目には児童の発達段階を考慮した相似性があるため、ボランティア学習に関連する内容は19項目といっても実質的には7種類であることがわかる。

次に3つの視点ごとに見ていくことにする。

「1 主として自分自身に関すること」に関しては、主体性や自律性の観点が入っているものを抽出した。1段目の「自分がやらなければならない勉強

や仕事は、しっかりと行う」「自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる」「より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する」は、ボランティア活動を行う上で必要な実践意欲、課題解決への意志に関わる項目であり、短い言葉で「実践意欲・意志」と総称することにする。2段目の「よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う」「正しいと判断したことは、勇気をもって行う」「自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする」は、ボランティア活動に必要な行動力（善悪の判断や責任ある行動を伴うもの）に関わる項目であり「自律的な行動力」と総称することにする。「1 主として自分自身に関すること」の項目群は、ボランティア活動の4つの特性の中では「自発性・主体性」と関連性のある内容項目となっている。

「2 主として他の人とのかわりに関すること」に関しては、他者の役に立つという観点だけでなく、支援を受ける側が恩恵に対して感謝する観点の項目も抽出した。ボランティア活動は他者との関わりで成り立ち「双方向の支え合い」という側面があるからである。1段目の「幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする」「相手のことを思いやり、進んで親切にする」「だれに対しても思いやりの心もち、相手の立場に立って親切にする」は、ボランティア活動の基本となる心情である。総称すると「思いやり・親切」となる。2段目の「日ごろお世話になっている人々に感謝する」「生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する」「日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる」は、1段目とは逆に日ごろ受けているさまざまな恩恵に対する感謝の気持ちに関わる内容である。総称して「感謝」とする。この視点は「心」「感謝」「尊敬」といった心情に関わる言葉が入っているのが特徴といえる。「2 主として他の人とのかわりに関すること」の項目群は、ボランティア活動の4つの特性の中では「無償性、非営利性」「公共性、公益性」と関連性のある内容項目となっている。

「4 主として集団や社会とのかわりに関すること」に関しては、ボラン

ティア活動が社会的な営みであることから、4つの視点の中では最も整合性の高い視点といえる。1段目の「身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす」は、ボランティア活動そのものといってもよい項目である。「身近な集団」とあるから、学級における係活動や地域のサークルなど、ボランティア活動だけのことを企図しているわけではなく、多様な集団への参加・参画において望まれる実践の態度を描いている。「進んで参加し」の部分が第1特性の「自発性・主体性」と合致しており、ボランティア活動のあるべき姿ともいえる。小学校時代からの、さまざまな集団活動に意欲的、主体的に取り組む態度の形成は、将来的なボランティア活動への参加にとって有益であろうと考えられる。これは第4特性の「創造性・先駆性」とも関わるものである。この項目は「主体的な参加・参画」と称することにする。2段目の「働くことのよさを感じて、みんなのために働く」「働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く」「働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする」は、働くことの意義に関わる内容であるからキャリア教育の視点ともいえる。特に3項目に共通して前半はそうである。なお、この「働くこと」を「ボランティア活動」と換言すれば、3項目ともボランティア活動の意義に関する項目といえる。後半は、貢献活動への実践・実行に関わる内容である。そこで、ボランティア学習の視点からは「社会貢献への理解・意欲」と総称することにする。3段目の「父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る」「父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる」「父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする」は、「手伝い」「協力し合って」「進んで役に立つ」という表現がボランティア活動と関連性があることから抽出した。ここでは3項目とも家族のことを描いているが、家族間で感得した良質な貢献意識は、ボランティア活動へと一般化し発展する可能性をもっている。いわばボランティア活動へのいざない、基礎となる内容項目といえる。（筆者は、小学生に対してボランティア活動のことを教える際、「社会の中のお手伝い」

小学校道徳におけるボランティア学習の位置づけ（長沼）

という表現を使っている。) そこでボランティア学習の観点から、これら3項目は「家庭でのプチボランティア」と総称することにする。家庭でのプチボランティアが本格的なボランティア活動への先駆的な働きをすることは言うまでもなく、家庭教育との連携のもとで学校の道徳教育が効果を発揮する好例となる。「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」の項目群は、ボランティア活動の4つの特性では「自発性・主体性」「無償性、非営利性」「公共性、公益性」「創造性、先駆性」のすべてと関連性のある内容項目となっている。

以上述べてきた道徳の時間の内容項目3視点とボランティア活動の4特性との関連性をまとめたもの（関連性のある項目に○印をつけてあるもの）が表2である。

表2 ボランティア活動の4特性との関連性

	ボランティア学習の視点での総称	自発性・主体性	無償性・非営利性	公共性・公益性	創造性・先駆性
1 主として自分自身に関する事	実践意欲・意志	○			
	自律的な行動力				
2 主として他の人とかかわりに関すること	思いやり・親切		○	○	
	感謝				
4 主として集団や社会とかかわりに関すること	主体的な参加・参画	○	○	○	○
	社会貢献への理解・意欲				
	家庭でのプチボランティア				

以上をまとめると、小学校の道徳の時間で扱う内容項目のうち、約3分の1でボランティア学習に関連した項目があり、それらを総合すると、ボランティア活動の4つの特性すべてに関する理解が得られる内容構成となってい

ることがわかる。

3. ボランティア学習論から見た道徳の時間

次にボランティア学習論のうち、学習目的に関するものと学習過程に関するものから、小学校の道徳の時間におけるボランティア学習の実践可能性を分析する。

(1)学習目的

ボランティア学習は、その目的から①ボランティア活動のための学習、②ボランティア活動についての学習、③ボランティア活動による学習の3種類に分類される⁸。このボランティア学習の3種類の目的に対して、小学校道徳の時間の内容は、どのような位置にあるのだろうか。前項の7種類の内容項目で分析してみる。

表3：ボランティア学習の学習目的との関連性

	ボランティア学習の視点での総称	①ボランティア活動のための学習	②ボランティア活動についての学習	③ボランティア活動による学習
1 主として自分自身に関する事	実践意欲・意志	●	○	○
	自律的な行動力	●	○	○
2 主として他の人とのかかわりに関すること	思いやり・親切	○	○	●
	感謝	○	○	●
4 主として集団や社会とのかかわりに関すること	主体的な参加・参画	○	●	○
	社会貢献への理解・意欲	○	●	○
	家庭でのプチボランティア	○	●	○

表3はボランティア学習の学習目的と関連があるかないかをまとめたものである。○は関連がある項目、●は強い関連がある項目である。これによると、道徳の時間における7種類の内容項目は、ボランティア学習の3つの学習目

的すべてに関連があることがわかる。

このうち「1 主として自分自身に関すること」の2種はボランティア活動のための学習と、「2 主として他の人とのかかわりに関すること」の2種はボランティア活動による学習と、「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」の3種はボランティア活動についての学習と各々関連性が強いと考えられる。「1 主として自分自身に関すること」における進んで何かを実行する姿勢・態度は、ボランティア学習の準備学習、動機づけの学習として位置づけることが可能であり、ボランティア活動においても発揮されるよう指導することで効果が上がると考えられるからである。「2 主として他の人とのかかわりに関すること」において他者を思いやり親切にすることや他者に感謝する内容項目は、ボランティア活動を通して学ぶ重要な視点である。「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」の3種類の内容項目は、どの目的にも合致するが、特にボランティア活動とは何か、その社会的意味について理解する学びとして有効である。家庭でのお手伝いがボランティア活動の家庭版であることを自覚することも大きな意味を持つ。

しかしここで重要なのは、関連性が強い項目かどうかではなく、どの項目もボランティア学習の学習目的に合致させられるということである。例えば「1 主として自分自身に関すること」の「実践意欲・意志」は上記のようにボランティア活動への動機づけに位置づけることも可能であるが、「進んで取り組む」という行為をボランティア活動の自発性の特性として意識させれば、ボランティア活動とは何かを認識する学びとしても構成できる（ボランティア活動についての学習）。また、活動した後に、社会の役に立つことをすることの意義を自己への洞察に生かせば、日常生活において進んで何かに取り組む姿勢について認知することができる（ボランティア活動による学習）。他の6種類も同様である。7種類の内容項目は、どの目的と合致した学びなのかを明確にすれば、ボランティア学習として取り組むことが可能である。このことは学習目的だけでなく、次に述べる学習過程のどこに位置づけるのかとも連動している。

(2)学習過程における位置づけ

ボランティア学習には活動のみならず、その前後の学習も含めた学びのプロセスがあることは先述した。具体的には活動の事前学習、体験活動、活動の事後学習である。さらに詳しくいうと「PARCD サイクル」⁹ となり、5つの段階がある(図1)。このサイクルでは事前学習がP段階、体験活動がA段階、事後学習がRCDの各段階となり、事後学習が3つに分類されているのが特徴である。

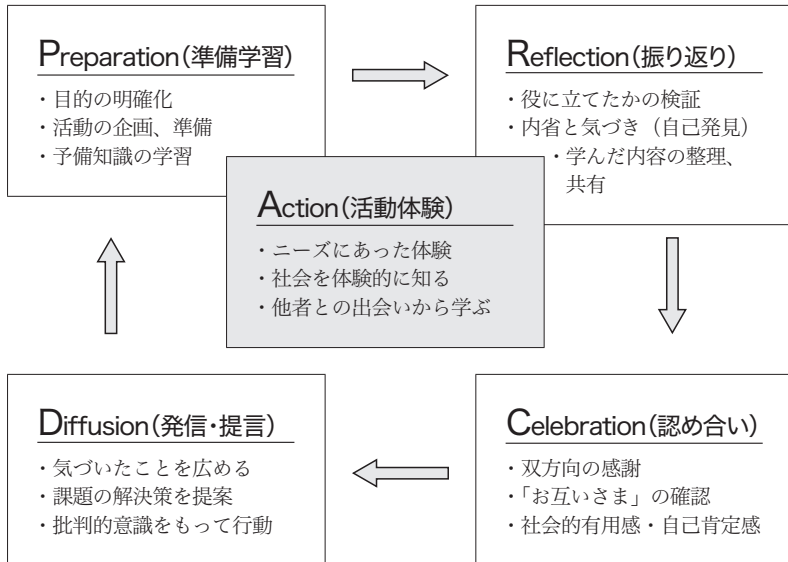


図1 ボランティア学習の PARCD サイクル (学習過程) 長沼 2010

この PARCD の各段階において、小学校道徳の時間の内容はどのような位置を占めるのだろうか。前項の7種類の内容項目で分析してみる。

表 4：ボランティア学習の学習過程との関連性

	ボランティア学習の 視点での総称	P (準備)	A (体験)	R (振り返り)	C (認め合い)	D (発信・提言)
1 主として自分自身に関する こと	実践意欲・意志	●	○	○		
	自律的な行動力	●	○	○		
2 主として他の人とのかかわり に関すること	思いやり・親切	○	○	●	○	
	感謝	○	○	○	●	
4 主として集団や社会とのか かわりに関する こと	主体的な 参加・参画	○	●	○		
	社会貢献への 理解・意欲	○	●	○		
	家庭での プチボランティア	●		○		○

表 4 はボランティア学習の学習過程と関連があるかないかをまとめたものである。○は関連がある項目、●は強い関連がある項目である。これによると、道徳の時間における 7 種類の内容は、ボランティア学習の学習過程に対して、そのいずれかの段階と何らかの関連性があることがわかる。

「1 主として自分自身に関すること」の「実践意欲・意志」と「自律的な行動力」はいずれも P、A、R の各段階と関連性があり、特に P 段階とは強い関連がある。決めたことをやり遂げるといった意欲や意志はボランティア活動を行う上で有効であり、よいと思うことを進んで行う態度（行動力）もボランティア活動につながる素養であるからである。もちろん両方とも事前の段階だけでなく活動中や活動を通じて態度形成されることもあるだろう。しかし上記の学習目的との整合性から P 段階と最も関連性があるとした。

「2 主として他の人とのかかわりに関すること」の「思いやり・親切」「感謝」は P、A、R、C の段階と関連性がある。「思いやり・親切」は、特に R 段階と強い関連性がある。進んで親切にすることの意識化は実際に活動を体験してみて効果が上がるものと捉えたからである。「感謝」は認め合いに相

当することから C 段階と最も強い関連性があるとした。なお、両方とも活動の事前にあたる P 段階に位置づけること（活動への導入として取り上げること）は可能であるが、ここでは上記の学習目的との整合性から、活動後の学び（ボランティア活動による学習）として捉えた。

「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」の 3 項目のうち、「主体的な参加・参画」と「社会貢献への理解・意欲」は P、A、R の各段階と関連性があり、このうち特に A 段階と関連性が強いとした。主体的に責任を果たすことや集団や社会のために働くことの重要性に気づくことは、活動のなかで体験・体感・体得するものと捉えたからである。また「家庭でのプチボランティア」は P、R、D の各段階と関連性があり、特に P 段階と関連性があるとした。この場合、家庭でのお手伝いの延長として社会へのお手伝い＝ボランティアへという学習過程を描く。また学習目的のなかで「ボランティア活動についての学習」と強い関連性があることから、活動で得た知識・理解や養った態度を日常生活や家庭での意欲的なお手伝いなどにつながっていくことを想定し D 段階に位置づけることも可能である。

以上の分析から、小学校道徳の時間で求められる内容項目のうち、ボランティア学習に関連のある 7 種類の項目は、すべて学習目的に合致し、学習過程の面でも多くの段階に位置づけることが可能であると言える。特に、活動とその前後にあたる P、A、R の各段階には関連性が得やすいことがわかる。同じ内容項目でも、活動への動機づけ（準備学習）として位置づける P 段階、活動中に態度形成するものとして位置づける A 段階（活動そのもの）、活動した成果として道徳性を養う役割として位置づける R 段階のいずれでも扱うことができることは、道徳教育における多様な学習過程の創出を可能にすることを意味する。

4. 道徳的実践としてのボランティア学習（まとめにかえて）

これまでの分析から、ボランティア学習は小学校の道徳の時間を活用した教育実践として十分整合性のあるものであることがわかった。そこで、以上

小学校道徳におけるボランティア学習の位置づけ（長沼）

の検討結果から道徳の時間を活用したボランティア学習の学習モデルを策定してみた（表5）。

表5：道徳の時間を活用したボランティア学習のモデル

学習過程	めあて	内容の視点	ボランティア学習の視点での総称	ボランティア学習における目的
P (準備)	自分にできることを考える	1 主として自分自身に関すること	実践意欲・意志	①ボランティア活動のための学習
			自律的な行動力	
A (体験)	社会のなかで役に立つことを実感する	4 主として集団や社会とのかかわりに関すること	主体的な参加・参画	②ボランティア活動についての学習
			社会貢献への理解・意欲	
R (振り返り)	他者に親切にする ことの意義を知る	2 主として他の人とのかかわりに関すること	思いやり・親切	③ボランティア活動による学習
C (認め合い)	お世話になった人々に感謝する	2 主として他の人とのかかわりに関すること	感謝	③ボランティア活動による学習
D (発信・提言)	家庭の中でできる プチボランティア を考える	4 主として集団や社会とのかかわりに関すること	家庭での プチボランティア	②ボランティア活動についての学習

これは最も強い関連性のある内容を学習過程に配置した一例であり、もちろんその他の関連性を取り上げて配置することも可能である。例えば「自分にできることを考える」（主として自分自身に関すること）を動機づけの内容としてボランティア活動への導入としているが、前述したように、家庭でのプチボランティアを想起させ、それを基に他者への関わりや社会への貢献に目を向けさせるという方法もある。表3からわかるように、7種類の内容項目はボランティア学習のいずれの目的にも合致させられることから、道徳の時間を活用したボランティア学習の取り組みは学習過程の中で多様な位置づけができる。既存の枠組みにこだわらず、学校ごとに特色ある学習展開を期待したい。

本稿では、小学校の道徳の時間を活用したボランティア学習の位置づけを探った。学習指導要領に示された3つの視点、7種類の内容項目から、ボラ

ンティア学習で育む心情的な側面、とりわけ生き方に関わる学びの内容を改めて把握することができた。各小学校においてボランティア学習を道徳的実践として機能させ、児童の健全な成長・発達に資するよう位置づける必要性を強調しておきたい。

¹ 筆者は同年5月に被災地へ赴いたが、その想像を絶する光景に絶句した。

² 上續宏道「小学校道徳副読本に見る高齢者問題」、『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究年報 Vol.2』東洋堂企画出版、1997年、pp.158-174。

³ 吉村文男「道徳教育とボランティア活動」、『道徳と教育』41（3・4）、日本道徳教育学会、1996年、pp.86-90。

⁴ 原壽「生涯学習社会における小・中学校のボランティア教育に関する基礎的研究」、『道徳と教育』46（1・2）、日本道徳教育学会、2001年、pp.110-127。

⁵ 田坂さつき「ボランティアと道徳ーボランティアと公平性についての一考察ー」、『湘南工科大学紀要 第36巻 第1号』2002年、pp.105-114。

⁶ この分析においては、文部科学省『小学校学習指導要領』2008年、東京書籍、および文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編』2008年、東洋館出版社を参照している。

⁷ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編』2008年、東洋館出版社、pp.144-145。

⁸ 拙稿「ボランティア学習の学習目的についてー学びの内容からの検討ー」、『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究年報 Vol.3』東洋堂企画出版、1998年、pp.28-45。

⁹ 拙著『実践に役立つボランティア学習の基礎理論』、大学図書出版、2010年、p.41。

（教職課程 教授）